35歳以下の優れた画家を顕彰

〝画壇に刺激と活性化〟

毎日新聞社 新たに「絹谷幸二賞」を創設

――絹谷氏に「賞」発願の思いを聞く

去る9月23日付毎日新聞朝刊は、「絹谷幸二賞」創設を1頁特集で大きく報じた。同紙によると、洋画家・絹谷幸二氏から「賞」創設の提案を受け、その趣旨に賛同。同新聞社が主催し、今年度から新たに「絹谷幸二賞」として設け、分野を問わず35歳以下の優れた若手画家を顕彰するとともに、具象絵画の意味を改めて問い直そうとするものだ。賞の発案者である絹谷氏に、緊急インタビューしその思い、考えを聞いた。

絹谷氏は、いま朝日新聞社主催で大規模な巡回個展を開催中だ。その最中に毎日新聞紙上で「絹谷賞」の構想が発表された。美術界には驚いた向きもあった。現存する人気作家の名を冠した美術賞そして3大紙である毎日新聞社の主催。同社は、かつて画壇への新人の登竜門「安井賞展」を長く主催・実施してきた実績がある。こうした経緯から

―直接のきっかけは何だったのでしょう。

「この春、コロンビアの日本大使館からボテロ賞の審査をして頂きたい、という話がありました。はるばる地球の裏側まで審査に行きました。ボテロは存命でお金を出して名前を貸しているだけなんですが、当地で立派な社会貢献をしていました。こういうこともやれるのだ、と感心させられました。ただ、私はさ来年、東京藝大をもう卒業（退官）なんです。来年の正月には〝終了展〟をやらなきゃいけない。これまで教える立場でしたが、それもできなくなる。藝大に何か残そうかな、とも考えました。ですが、藝大には大橋賞があり、日本画に平山郁夫賞があります」

―もっと広く役立てたいということですか。

「実際、藝大をでてからが難しい。放り出されるという活気がなくなっている。若い人の台頭のため少しでも手を差し伸べないと。どの業界もそうだろうけど、育てること、それが不可欠なんだ。そして文化・芸術が元気にならないとその国そのものが活力を失い、沈滞していってしまう。文化芸術こそが大切なんだという思い、それを育てよう、そのための協力を美術界にしたい、その気持ちが全てです」

―今回、毎日新聞社さんと組まれましたが。

「私が31歳で安井賞をもらい、その後、毎日芸術賞をいただいたこと、これもご縁だと。一つの出会いのような、それ以外にはないです」

―今後、絹谷賞にはどう関っていくのですか、賞の審査員3名のかたとは？

「私の仕事、やるべきことは、ここまでなのだと思う。私は賞金100万円、パーティー代とか他の経費を出すだけでいい。他のことは私の及ぶ範囲ではありません。〝賞〟については自分ではもう完了しています。審査の方の名前は聞きましたが、挨拶もしていないのです。あとは主催者がやっていくでしょう」

―今後の抱負は。

「皆さんはどう思われるか、自分ではいまだにああじゃない、こうじゃなかったと悩む。まだ『これが絹谷幸二だ！』という仕事が出来てないのです。昔受賞した若い頃は、ピシッとした感覚が出ていた、でもそのままで仕事を続けていったら子ども4人は育てられなかったかもしれないけど。（笑）次の課題が山ほどあってまだ死ねません」。

絹谷幸二氏・略歴

1943年奈良県生まれ。東京藝術大学油画科卒業（小磯良平教室）。67年同大学院壁画科修了。独立賞。74年第17回安井賞。83年美術文化振興協会賞。87年日本芸術大賞。89年毎日芸術賞。01年独立展出品「蒼穹夢譚」で日本芸術院賞受賞。現在、日本芸術院会員、独立美術協会会員、東京藝大教授。

自作を背に思いを語る絹谷氏

●絹谷幸二賞の概要　対象＝当該年の12月現在、満35歳以下。当年（1～12月）に日本国内で開催の展覧会に出品された「具象的傾向の絵画」に限定。筆またはそれに準じる画材・身体を用い、紙やキャンバスに描いた絵画。主催＝絹谷幸二氏の資金協力を受け、毎日新聞社が主催、運営。選考方法＝毎日新聞社が若手画家の創作活動を継続的に追っている美術館学芸員や評論家、ジャーナリストらに推薦を依頼。そのリストを3人の委員が、来年1～2月に審査を経て受賞者1人を決定。発表＝来年2月下旬（予定）、毎日新聞紙上。受賞者には賞状と賞金100万円を贈呈。（9月23日毎日新聞より）

◇審査する選考委員3氏＝本江邦夫（多摩美術大学教授）、中井康之（国立国際美術館主任研究員）、福田美蘭（画家）